

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0047号
護國青年會議機関紙 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成20年3月31日

血染めの履歴書、胡錦濤の正体を暴く!!

十九年前のラサ大虐殺で、胡錦濤は何を行なったのか、そこには胡錦濤の血塗られた悪魔の履歴書が存在する。

十九年経った今、人民戦争を宣言した現チベット総督の張慶黎は胡錦濤の愛弟子であり、東トルキスタン弾圧組織の元リーダーである。この二人の非人は今またチベットの人々を奈落の底に陥れようとしている。

ラサの街は中共軍のキヤタピラに蹂躪され、そこに暮らすチベット人からの音信は、ほぼ途絶えた。七世紀から続く宗教都市は、悲鳴さえも聞いて貰えない闇の底に沈んでいる。こうしている間にも兵士らによる過酷な弾圧は続き人々は恐怖の中にいる。

「治安部隊は発砲しておらず戦車など人を殺害する武器は一切使っていない」十七日の会見で、支那共産党はそう強弁していたが、殺人部隊投入の発覚で、アバでの射殺遺体に続いて支那侵略政府の嘘がまた一つ暴かれた。

チベット地域を管轄する成都軍区は最高レベルの警戒態勢に入ると共に、増派を続けている模様だ。チベット人弾圧が加速するカム地方アバ周辺では、中共軍の大移動も相次いで確認されている。成都軍区の兵力だけでも自衛隊に匹敵する二十万人規模という

圧倒的な軍事力もって有無を謂わせない恐怖支配のゴーストを出したのは支那共産党中央委員会であり、その軍事委員会の主席は誰あるうあの二十一世紀の殺人鬼・胡錦濤である。悪名高い恐怖の殺人鬼・胡錦濤は十九年前と同じ手法で、チベット人の祈りの聖地を血で染め上げようとしている。



殺人鬼・胡錦濤と張慶黎

相次ぐ高僧の公開処刑

一九八八年十二月末、胡錦濤は四十六才の若さでチベット総督となった。それまでの歴代のチベット総督はすべて軍人だったが、胡錦濤に軍歴はなく初の文民総督であった。

しかし皮肉なことにその文民総督が、狂気の弾圧を行うとは、この時は知る由も無かつた。

胡錦濤が総督となった時、チベットは揺れていた。それ

までの圧政に加えて、市民の精神的な拠り所となっていた名だたる高僧たちの公開処刑を目の当たりにし、民衆は今まさに蜂起しようとしていた。それに対し、新任の総督が追い討ちかけたのであった。

修羅場と化したラサ

チベットにはモンラムと呼ばれるチベット暦の新年に行われる大祈禱祭がある。モンラムはチベット人には欠かせない最大かつ最重要行事だが、胡錦濤は、モンラムに向けて地方から多数の僧侶がラサに集まるのを防ぐためにモンラムの禁止を宣言した。敬虔な仏教徒である市民と僧侶が反発したことは言うまでも無いことだ。

一九八九年二月七日、モンラム禁止令が発せられた翌日チベット仏教の総本山ジョカ寺に市民が続々と集まり、抗議の声をあげた。胡錦濤は中央政府に軍隊の出動命令とその指揮権限を要求した。胡錦濤の要求は受け入れられ、ラサは修羅場と化していくのであった。

三月五日、ジョカン寺に集結した市民はチベット民謡を歌いながら街頭に繰り出していった。平和的な行進の参加者は雲霞の如く増え、いつしか稀に見る大行進となり、ラサは支那の弾圧に抗議する一般市民の熱気に溢れていた。

しかし、悪魔の使者・胡錦濤は、非常な決断を下すのであった。

同日午後、胡錦濤は、この平和的民主的に行進に対して軍隊を出動し、武力による鎮圧を開始した。チベット人の魂の叫びは銃弾によってかき消され、うめき声や泣き叫ぶ声だけが響いた。ラサの町は血と涙で覆われ阿鼻叫喚と化してしまった。現在行われている大虐殺もこの時と同じような惨状であることは疑いの余地も無い。胡錦濤はジョカ寺にチベット人が集まり、その数が膨れ上がるのを待つて襲撃を仕掛けたのである。

ラサ市内を武力で制圧した後も胡錦濤は弾圧の手を緩めなかった。現地の支那共産党や軍の責任者たちを召集して緊急会議を開いた。席上、穏便に対処すべきだという支那人にしてはまともな意見も出たが、胡錦濤はまともな声を抑えつけて、支那共産党中央本部に戒厳令の公布を求めたのであった。これによって三月八日、ラサ地域に支那史上初の戒厳令が発せられた。

戒厳令下のラサでは、市民の数人の集まりも集会と見なされ、市民は直ちに拘束され暴行を受けた。また軍隊は「煽動した」とか「悪い噂を流した」などと謂われも無い罪で僧侶や市民を捕らえ取調べ

と称して残虐な拷問を加えた。この戒厳令は実に一年二ヶ月の長きにおよんだ。海外メディアは、旅行者や滞在者などの中立者の証言から、八百人以上のチベット人が虐殺されたと推定したが、支那政府の発表はたったの十三人で、そのうちの八人は警官や兵士という偽情報であった。今回の騒乱も支那政府の発表では今月二十二日現在、十九人となっているがインドにあるチベット亡命政府の発表では九十九人である。十九年前のこと振り返ればどちらの情報もまやかしなのが察しがつくというものだ。*支那の侵略による死者は二十万人以上。



猶予はならない人道上の危機
かくして支那の最高権力者となった胡錦濤は、張慶黎を重用し、二〇〇六年五月に二代目殺人鬼としてチベットに送り込む

だのだ。この時既に今回の武力弾圧はセットアップされ、十九年の歳月を経て殺人鬼の師弟は再びチベットに血の雨を降らしたのである。

胡錦濤が最も恐れているのは、国際社会からの非難ではなく、チベットの独立である。かつて胡錦濤は「チベットで一步でも退いたら我々は民族の罪人となつてしまふ」と述べたことがあるが、チベットの独立は胡錦濤にとつて、万死に値するものなのだろう。毛沢東から継承した殺人鬼のDNAを持つ胡錦濤にとつてチベット人が流す血や涙は関心事ではない、己が末代まで続く「民族の罪人」という汚名を着ることを恐れているに過

ぎないのだ。その身勝手な論理のために、いつたい何万人のチベット人が犠牲になつたというのか、いったい何万人のチベット人を殺せば気が済むのか。

現在、チベットでは胡錦濤と張慶黎の殺人鬼師弟による残虐極まりないジェノサイドが行われている。それだけに国際社会の素早い対応が求められている。すでに虐殺開始から半月以上が経過した。こうしている間にも何人かのチベット人が犠牲になつていることが予測される。最早一刻の猶予もならない人道上の危機であり、今回の大量殺戮は支那が叩きつけた国際社会への挑戦状である。

編集人・戸出蒼流

一支那虐殺の歴史

一九四六年	東トルキスタンの虐殺	首謀者・毛沢東	死者・一千万人以上
一九四九年	チベット侵略	首謀者・毛沢東、胡錦濤	死者二十万人
一九五一年	三反五反運動	首謀者・毛沢東	死者・七十万
一九五八年	大躍進政策	首謀者・毛沢東	死者・一千万人以上
一九六〇年	文化大革命	首謀者・毛沢東	死者・三千万人以上
二〇〇八年	チベットの虐殺	首謀者・胡錦濤	死者・九十九人(チベット亡命政府発表、被害は拡大中)

傍若無人な支那に抗議し 北京五輪をボイコットしよう

左上の表をご覧ください。紙面の都合で戦後の一部の虐殺だけを取り上げたが、これが支那の実態であり、支那との友好など幻想に過ぎないということを我々日本人は強く認識すべきである。支那に媚びれば媚びる程支那に諂えば諂う程、東トルキスタンやチベットの次は台湾であり、日本であるということをお肝に命ずるべきである。

本年八月に「誤輪」とも「汚輪」とも言われる北京五輪が開催される。支那は五輪を開催するにあたり「二〇〇八年の五輪開催までに人権問題を改善する」と

ルキスタンへの弾圧強化であり今回の残虐極まりないジェノサイドである。これらは明確な約束違反であり斯様な殺人国家に「平和の祭典・オリンピック」を開催する資格など微塵もない。

ヨーロッパではポーランドのトウスク首相が支那の弾圧と迫害に抗議し、開会式に出席しないことを表明した。ドイツのメルケル首相も不参加を決定し、チエコのクラウス大統領は「これ(チベット弾圧)が中国の真の姿だ」と激しく支那を非難して不参加を表明した。フランスのサルコジ大統領は、ブラウン英首相との会談で、開会式不参加を示唆した。EUを中心とした一連の動きは今後、大きな潮流となつて、世界各国へと広がって行くことだろう。



IOCおよび国際社会に約束した。だが支那のやっていることは中国共産党つまり中狂の意にそぐわない民主活動家に対する拘束と拷問と迫害であり、東ト

このような状況下で日本はどう動くのだろう。冬の北京で「日中関係に春が来た」と舞い上がっていた上州のコンニャク芋福田ボン助では「日本は中国の嫌がることはしない」とほざくのが関の山である。「支那は人権蹂躪を即刻やめろ、さもなければ北京五輪をボイコットする」くらいの啖呵を切つて欲しいものだが、コンニャク芋に「毅然とした態度」を求めるのは一場の春夢なのだろう。

編集人